平成30年度第2回宇都宮市冒険活動運営協議会会議議事録

○日時　平成30年　12月7日（金）　9：30～11：00
○会場　宇都宮市冒険活動センター　会議室
○出席者氏名

・狐塚　章一委員　（市小学校長会）
・小堀　茂雄委員　（市中学校長会）＜副会長＞
・池田　　誠委員　（市ＰＴＡ連合会）
・五十嵐市郎委員　（市子ども会連合会）
・櫻井　政義委員　（市ﾎﾞｰｲｽｶｳﾄ･ｶﾞｰﾙｽｶｳﾄ連絡協議会）
・北條　成男委員　（市レクリエーション協会）
・黒後　　洋委員　（宇都宮大学）＜会長＞
・平野　　勝委員　（篠井地区ゆたかなまちづくり協議会）
・伊澤　文彦委員　（県林業センター）
・坂内　剛至委員　（有限会社ネイチャープラネット）
・佐藤奈美子委員　（公募）
・宇賀神光夫委員　（公募）

（事務局）稲澤 正明所長，村山 弘樹副所長，須田 浩太郎指導主事，小林 真理指導主事

○欠席者氏名　　月橋　春美委員　（県キャンプ協会）

○公開　（傍聴者の数　0人）

１　開　　会
２　会長あいさつ
３　議　　題
（１）　報告事項
平成 30年度事業経過報告について（ア学校受入事業，イ主催事業，ウ一般受け入れ事業）

事務局　：　（資料にそって説明）
会　長　：　ご意見，ご質問はあるか。
宇賀神委員：　12月3日の読売新聞に，親子で自然体験をする，また子どもが親に自然体験について話す機会を教育現場でつくることが必要であるとの記事が出ており，自然体験の不足が課題となっているが，冒険活動センターは，まさに親子の自然体験活動の場として役割を担っていると考えている。別紙 5「利用アンケート集計」の利用回数で「4 回以上」との回答が12と多いが，最高どのくらいなのか伺いたい。
事務局　：　4 回以上という回答者が，何回利用しているかは，アンケートでは調べていない。今後調べていく。
宇賀神委員：　リピーターが多い印象である。回答数が 50 であるのは，ちょっと少ないが，回答者のうち多くがリピーターであり，実際もっとリピーターがいると思われる。親子で自然体験をする場として，冒険活動センターは非常に注目されているのではないか。そんな中様々な事業を行う上で指導者は不可欠である。地域連携として宇大との連携が挙げられているが，教員志望の学生に呼びかけて，さらに連携を強めていくことが課題ではないか。教員志望者は，必ずこの施設で何らの形で学生主体で成果を出せるような関わりをもつよう大学が推進していく必要がある。そうでないと冒険活動センターの職員体制が苦しくなってしまうのではないか。
会　長　：　かねてからセンターと宇大との連携は実践されている。2年生は火曜日授業がなく，「教職ボランティア入門」において，学校現場の要望に合わせて，授業支援や行事等の活動補助等に学生が参加している。まだ2年生なので，専門的知識はなく，できることは限られているが，現場の生の声を聞く機会として，また3年での教育実習のプレ段階として学校に馴染んでもらう意図で実践している。学習指導要領の改訂にともない重視される3つのキーワードが，道徳教育，自然体験活動，体育・スポーツ・健康であるが，全国的にみても宇都宮大学の実践はめずらしく，取り組みとして貴重であると考えている。宇都宮大学では，現在単独での教育学部の運営が難しくなっており，群馬大学と協同しているが，今後も群馬大学と連携して宿泊をともなう自然体験活動の実践を行っていく予定であり，その際冒険活動センターを使わせていただけないか検討しているところである。また，現状として，冒険活動センターからも学校からも学生への関わりの要望はたくさんあるのだが，学生として本分である授業等学業のかたわら，国立大である本大学の学生は，学費・生活費等アルバイトで補っているものも少なくない。そういった現状の中ボランティアの活動とのバランスも難しさがある。しかしお話いただいたように推進していきたい思いはある。多くが教員を目指している中で，「野外教育」を入口

としてその後，冒険活動センターで勤務しながら研修させていただいている学生もいる。白鷗大，作新大，宇大など県内の大学の連携において，自然体験活動の場として冒険活動センターの位置づけをさらに示せるようにしていきたい。

事務局（所長）：宇都宮大学には，今までたくさんのご理解をいただき，長年にわたり協力いただいてきた。具体的には，人，知識，そして事業効果の研究など様々な形で連携いただいている。教員を目指す学生にとっては，授業，自然体験施設での指導者としての経験，学校現場での経験など，一つ一つが将来にとって有意義なものである。学生がたくさんのやるべきことがあり，限られた時間の中で，できうる限りの連携を図っていただいていると感じている。現在，臨時職員として勤務している宇大の学生がいるが，アルバイトとして賃金がどうなのかという現実的な面でみると，冒険活動センターで１日働いても，一般的に他と比べてけして多くはない。そんな中で経験をと前向きに勤務している学生に対して，冒険活動センターで子どもたちと何らかの関わりを通して将来教員として役立つものが得られると伝えているとともに大学にもご理解いただいている。今後も宇都宮大学と連携して事業を行っていきたい。

会長：その他いかがか。

平野委員：一般利用のアンケート集計をみると，「風呂を夜 11 時までにしてほしい。」「トイレをウォシュレットにしてほしい。」などとホテル利用のような気持ちでいる方もいる。自然体験の場でどこまで整備が必要であるかという点について協議が必要である。

会長：毎年アンケートをみると，オートキャンプ場のようにとらえて，施設の特性を理解していない方の利用もある。安全面からの整備の視点は必要であるが，例えば「夜間暗い」という意見に対して安全面からと自然の良さを感じてもらうという視点でバランスを考えていくことが重要である。要望の中で対応できる点はあるか。

事務局：生活のしおりについては，下見の際に要望があれば渡すよう改善していきたい。対応できるところと，職員や予算の点から難しいものもある。検討しながら少しずつ改善していく。

会長：ウォシュレットの要望があるが，時代としてその傾向であるのか。学校ではいかがか。

小堀委員：多目的トイレにはあるが，他は違う。

会長：大学では，一新した。学生が集まらない要因となる。現在のオープンキャンパスでのアンケートでは，「トイレがきれい」との声が多くあがるが，以前，図書館と多目的トイレしかウォシュレットでなかった際には，「トイレが汚い，くさい」とのイメージが非常に強かった。

事務局：冒険活動センターも多目的トイレはウォシュレットである。

会長：限られた予算の中では，なかなか難しいであろう。その他いかがか。

小堀委員：別紙 2「保健室の利用状況」では，虫刺されや捻挫，打撲が多い。毎年同じような傾向だと思うが，自然体験活動でこういった多少の怪我はつきものである。もちろん怪我がおきないよう指導いただいた上で，万が一怪我が起きた場合にどう対処するかという点が重要である。今までも対応いただいているが，引き続き，適切な対応をお願いしたい。「送院詳細」にある８月のロープクライミングの実技研修中の事故について，差支えなければ詳しく伺いたい。

事務局：アクティビティ研修に参加していた初任の男性教員が，アドベンチャーゲームに参加していた際の怪我である。吊り橋からロープを垂らし，下から上がってくるロープクライミングという活動で，冒険活動教室で中学生も行っている活動である。ロープを登っている際に上腕を骨折し，救急車で搬送された。その後，先生からの聞き取りや消防の方に来ていただき，原因の究明のための検証を行ったが，直接の原因は分からなかった。腕に何らかの圧力がかかって骨折にいたったようである。

小堀委員：なぜ怪我をしたのか不思議である。

事務局（所長）：今までたくさんの中学生がこの活動を行ってきているが，今回のような事例はセンターで初めてである。どういった状況でおきたのか分からなかったため，活動で使用している登山器具のメーカーに問い合わせたが，そういった事例は知らないとの回答であった。いろいろと検証を行ったが，直接的な原因は判明できなかった。ただ，それでは子どもたちが活動を行う上で不安が残るため，登山器具を，今まで使用していた旧式のものから一新した。旧式といっても今まで使用してきた器具に安全上の問題はないのだが，最新のものは，握る部分にグリップがついているなど，より操作しやすくなっている。夏休み明けの学校からそのような対応を行っている。

小堀委員：私たちも全く聞いたことがない事例であった。

狐塚委員：一般利用のアンケートの意見・要望として「駐車場台数を増やしてほしい」という要望があるが，第二駐車場から鉛が出て整備となり，その後臨時駐車場となっているのかと思うが状況を教えていただきたい。

事務局　：　今年度初めに整地が完了し使用可能になっている。園内には平らな土地が少ないため，冒険活動教室では，マウンテンバイクの活動において第二駐車場にて乗り方を練習し，その周辺でダウンヒルを行うなどの活用もしている。また，フェスティバルに間に合うように白線を引き，現在 30 数台駐車することができる。第一駐車場が満車となる場合，第二駐車場を使用するようにしている。

坂内委員：　フェスティバルで 1,400 人来園があったとのことだが，第二駐車場も合わせて台数は間に合ったのか。

事務局　：　第一駐車場，第二駐車場の他，近隣の方々にご協力いただいて周辺にも駐車スペースを確保した。出入りがある中で，職員で案内を行い，駐車できなかった方はいなかった。

会　長　：　1,400 人は想定内の人数であったのか。

事務局　：　想定よりも多い来園であった。

会　長　：　広報がうまくいったということか。

事務局　：　天候に恵まれたことが要因として一番大きい。昨年は雨天であったため，昨年と比べて来園者数が多かった。

（２）協議事項

①　平成 31 年度事業計画について（ア　学校受入事業，イ　主催事業，ウ一般受入事業）

事務局　：　（資料にそって説明）

会　長　：　ご意見いただきたい。

宇賀神委員：　主催事業における地域連携として，篠井地区には田畑が多く休耕田があるので，その活用はどうか。夏場に泥の中でのドッチボール等遊びなど篠井地区の農家の方々と連携した自然体験ができるのではないか。また，重点事項として「魅力ある主催事業の展開」で大谷地区をフィールドとして検討しているとのことだが，具体的にはどんなものか。多気山の登山や歴史を学ぶといった何か具体案があれば教えていただきたい。

事務局　：　ご提案いただいた休耕田の活用については，大変魅力的な活動である。地区の方々にご協力いただければ，子どもたちにとって楽しい活動になると思われるので，実施について検討していきたい。新しいフィールドとして大谷地区については，歴史的な遺産が多く魅力ある地域である。例として，文化財等を巡るウォークラリーなども検討している。

会　長　：　今，大谷は観光客も多く，いろいろな事業が行われているが，地域観光になってしまうとまた趣旨が異なる。実際にもう大谷地区と連携し進んでいるものはあるのか。

事務局　：　現在のところはまだ検討中であり，今後進めていく予定である。使用が難しい場所等もあるため，具体的にどんなものが活動としてできるか考えていきたい。

事務局　：（所長）　大谷地区を新しく検討している点については，冒険キャンプにおいて大変リピート率が高いため，大きくプログラムを 2 本設けて各年で実施することで，内容の重複を避け，リピートの参加者にとっても充実した事業となるのではとの考えからである。また，これまで実施してきた冒険キャンプのメインとなる 2 日目の活動では，川の中を歩くダイナミックで冒険色豊かな活動を行っているのだが，今年度台風の影響による川の増水により活動が実施できなかった。このように悪天候に弱いという面があるため，そういった天候の影響を受けにくい新たなフィールドをとの視点から大谷地区を検討している。ご指摘の通り越えなければいけない様々なハードルがあるので，一つ一つ丁寧に対応し検討していきたい。

会　長　：　宇都宮の子どもたちは小・中学校で冒険活動センターに来ているが，大学生になって来た学生たちは，10 代で来た印象と 20 代で来た印象は異なり感動は大きいようである。ただ毎年一般で利用する人にとっては，何も変わっていないというイメージもあるようで，印象も角度によって異なる。

坂内委員：　大谷でガイドを行っているが，宇都宮に住んでいても「宇都宮にこんな所があるのか。」と感動する方が多い。地下の空間など，まだまだ知られていない所が大谷にはたくさんある。実際に住んでいる子どもたちが「宇都宮にこんなすばらしい所がある」と知ってもらう機会を子どもの時に作ることは，とても良い経験となる。今後いろいろ安全面などクリアしなければならない問題は出てくると思うが，とても良い教材であるのでぜひ検討していただきたい。また，来年度のフェスティバルにおけるアウトドア関連企業等の協力ついてだが，我々もぜひこちらのフィールドで自社の PR などできればと考えている。栃木アウトドアプロモーション協会という団体があるので，声をかければいろいろ協力が得られ，青年層への PR が図れると思われる。ただし実施時期が 10 月中旬であるとまだシーズン中のため，なかなか協力が難しい。11 月の中旬くらいからだとオフシーズンとなり，進んで協力する会社も多くなると思われるので，開催時期の検討をしていただければと思う。

会　長　：　自衛隊の協力は前からあったのか。今回が初めてか。

事務局　：（所長）　自衛隊の広報の方が，自衛隊員募集のパンフレットやポスター掲示で毎年センターに来所しており，そのつながりからノウハウをお持ちだとのお話を伺い，今回実現した。さらに

いろいろな引き出しがあり，今後冒険活動センターでの活動を行う上でも，助言・協力いただければと考えている。

会　長　：　自衛隊については宇都宮大学でも協力いただいている。いろいろな施設をもっており，施設利用については難しい面もあるが，ノウハウを教えていただくのは，自衛隊の方としても好意的にとらえてくれている。利用できる面については積極的に協力いただくとよい。

五十嵐委員：　市子連として，利用者のための研修会では毎年お世話になった。ただ時期的に，市 P 連の行事や学校行事等との重なりもあり，参加が難しい面もあった。以前この時期ではない日程で研修を行ってきたのだが，冒険活動教室の日程変更等にともない，6 月前半の開催となった。冒険活動教室で子どもが利用するのでといった声もあり，あまり参加が得られず申し訳ない。残念ではあるが，事業廃止はやむを得ないと考えている。

佐藤委員：　主催事業が一部廃止になったとのことだが，冒険キャンプやちびっこキャンプは，参加できる人数に限りがあり，たくさんの人が参加できないイベントが多いと感じる。学童の指導員として，不登校の児童を抱える保護者が子どもを外に向けさせる機会が得られず困っている様子をみる。キャンプはそういった子どもたちにとってハードルが高い。小さな成功体験を積む機会の少ないそういった子どもたちにとって，自然と関わり合う冒険活動センターでの活動は，とても有意義なものである。小学校で冒険活動教室に参加する前にセンターに来る機会があるとよい。以前あったエンジョイサタデーのように，日帰りのちょっとした主催事業でかまわないので，引きこもりがちな子どもたちが親子で体験できる場として，冒険活動センターは有効な場所になりうるのではないか。

事務局　：　学校受入れにおいて，不登校の児童生徒が冒険活動教室をきっかけとしてよい方向に向かった事例がある。また，9 月に不登校の子どもたちが通っているまちかどの学校の受け入れを例年行っており，一日活動を行っている。日帰りで不登校の子どもたちが親子で参加できるような事業が実施できるかについては今後検討していきたい。

会　長　：　生きる力の研究の中で不登校の子どもたちに自然体験活動が有効であること示されていた。

佐藤委員：　まちかどの学校自体を知らない保護者もいる。冒険活動センターを，小学校 5 年生と中学校 1 年生でないと行けない場所と思っている保護者も多い。不登校のお子さんをもつ保護者にフィスティバルの参加を紹介したことがある。

会　長　：　より広く周知することが必要ということか。SNS やフェイスブック等の展開はどうか。

事務局　：　ソーシャルネットワークを活用した広報は行っていない。市のホームページには情報を載せている。

会　長　：　関心がある方は見ると思うが，市のホームページは見る人が少ないのではないか。栃木県の国体の PR で，フェイスブック，ツイッター，インスタグラムを活用しているが，フォロワー数はすべて合わせても 80 人しかいない。インスタグラムについては 14 人である。SNS の活用をうたいながら，こういった現状を新聞で報じられてしまった。難しい面もあるが，情報の伝え方，世代でギャップがあるので，そろそろ検討してもよいのではないか。

宇賀神委員：　自治会の回覧は，各家庭で見るので伝達方法の一つである。広報うつのみやも有効である。

会　長　：　保護者にとって一番有効なのは何か。

佐藤委員：　保護者間では，口コミによるものが多い。学校には冒険活動センターの主催事業の案内が配付されるが，学童にはこない。仕事をしているような家庭は，家庭でなかなか外へ連れていけないので，こういった事業により関心がある。

事務局　：　11 月に開催した「もりであそぼう」の事業では，今年度より子どもの家および放課後子ども教室に配付を行っている。今後こういった留守家庭児童会にも PR をしていきたい。

小堀委員：　もし不登校児を対象に何か事業を行う場合，学校を通して不登校の子どもたちの家庭に渡すことが可能である。まずは実施するか否かについては検討が必要であろう。

会　長　：　ツイッターだけであれば，宇都宮市でアカウントをもっており，5,000 人のフォロアーがいる。そこに冒険活動センターの HP のリンクを貼り付ければ，見る方も増えるのではないか。なかなか独自にやっていくのは職員の負担もあるであろう。公式なもので利用できるものを活用してはどうか。その他いかがか。

坂内委員：　一般利用が減っており，主催事業でも「利用者のための研修会」の廃止ということで一つ提案である。指導者養成の研修会を今まで実施してきているが，資格は取ったが，なかなか現場に出る機会がなく忘れてしまったという方もいると思われるので，そういった方を対象としたスキルアップの研修会を行ってはどうか。何年も現場に出ていないと，気持ちはあっても不安があり躊躇しているような方もおそらく多くいるのではないか。試しに実施してみてはどうか。また，先ほど自衛隊との連携という話があったが，防災という観点から自然体験と防災は密接な関係があるので，何かこの施設を使って行える防災キャンプや日帰りの体験イベントの企画もよいのではないか。

池田委員：　子どもたちは冒険活動教室でセンターを利用しているにも関わらず，保護者は利用するこ

とが少ないので，PTA 連合会において保護者が施設を知る機会として研修を企画できればと考えている。市Ｐ連は４ブロックに分かれており，以前ブロックの研修として冒険活動センターでの研修会を企画したのだが，例年行っている講演会の後にレセプションを行う形でなかったため実施できなかった。アクティビティに興味があるので体験できればと考えている。保護者も子どもたちが行く場として関心はあると思う。

会　長　：　冒険活動センターで「〇〇愉快だ宇都宮」のロゴマークをとるのは難しいのか。

事務局　：　申請すれば取得はできる。

小堀委員：　学校でとっている所も多い。

会　長　：　宇都宮大学でも作っている。ぜひ「冒険活動センター」の言葉を入れて作るとよい。

池田委員：　先日，宮っこチャレンジで職場体験として子どもがお世話になったが，まだ冒険活動センターについて自身もよく知らない。この素晴らしい施設についてあまり知らない保護者が多い。

会　長　：　開所して 23 年が経ち，そろそろ冒険活動教室に参加した子どもたちが親世代となる時期である。後数年たつと，また認知のされ方も変わってくるか。

狐塚委員：　学校利用で新しいアクティビティの開発が挙げられていたが，案として検討されているものがあれば教えていただきたい。

事務局　：　小学校向け一つ，中学校向け一つ開発できればと考えている。小学校向けの案として，人気の高い活動である冒険木登りにおいて，登った後に子どもたちが冒険心をくすぐられるような降下の仕方ができればと検討している。ジップラインのような方法である。中学校では，こちらも人気の高いアドベンチャーゲームとして，ロープクライミンングという吊り橋へと下から昇って行く活動があるが，吊り橋からロープを使って降下する活動ができないか検討している。器具の購入など予算面も踏まえた上で，安全第一で新アクティビティを開発していきたい。

小堀委員：　初めて冒険活動教室でセンターに来る子ども達からすると，現状においても充実したアクティビティが十分ある印象である。

会　長　：　少しずつ変化があるとさらによい。

5　そ の 他

事務局　：　保護者に対してもう少し PR をというご意見をいただいたが，今後センターとして，冒険活動教室で子どもたちがどのような 3 日間を過ごしているのか，また学校教員がどのように子どもたちと関わっているのか周知していきたいと考えている。子どもたちがどのような活動を行っているかは各校の学年便りなどにより保護者の方々へ知らされていると思うが，学校の先生方がどのように頑張って子どもたちと関わり，冒険活動教室に取り組んでいるかという点については，なかなか学校からの発信は難しい。一番近くで見ているセンターの側からそういった面を伝えていけるようにしていきたい。

6　閉　　会